秋葉霊験繪本金石譚

五

へ遠13
980
5

遠13
ペ
號 980
巻 5

本清

秋葉
霊驗繪本金石譚前編巻之五

懲二兇香之助拉狭衣子條

浪速
山田山安子戯編

再統王家戎逃奔せし多賀島香之助ハ一度本國の又伊織ハ對面し素意
戎告人と都戎忍ひ出しふ彼高股の金瘡ちりふ疼痛戎增日戎重るハ
從ひ次第ハ歩行成ぞく殆と困窮ハ及ひるるが江列唐崎ハ家僕が親里
ある戎思出し其ぞ方へ尋行主戎頼ミ医戎迎へ治療戎乞ハ医香之助ハ
金瘡なりなく歎息し是ハ已ハ破傷風となるり今一月治療後ミなハ医
藥施し難なハ早く治療を乞ハ運強さよして是より日くふ医藥
戎用ひ療しるる此家の主ハ松六にて伊織が僕志賀藏ある者の又あれど
貧し乏漁又されども香之助を主家の子息と傳ち信しく双病しる故香之

助も其志を悦び心置なく止宿して保養を加へくるゝを思ひしよりはるかに
で其年も病暮し翌年五月の末ゆ衝と平癒しよりくるゝ香之助大いに
悦ひ松六夫婦ゆ長々の恩志を謝し本國へ旅立んを支度告るゝ松六悃ろ
ゆ諫め君長し既患病癒こゝ幾日も過ざるゆ斯る炎暑を犯し旅行
ゆ迚もおんゆ如何なり今暫く保養を加へ度と抑留るゝより亦半月余
逗留しくるゝ身体倍壮健ゆあるゝ鬼角ゆ心急れ遂ゆ夫婦ゆ別を告
唐崎を立こ東海道を遠列へと志し却て路費多くゝ
朝ハ疾立夕ハ遅く宿を一日も早く濱名ゆいたんを支度念こ行て江列
醒井の宿を通り過ぬ日ハ暮ゆくゝ尚先の宿まくゝと歩を進めくるゝ身体
大ゆ疲を足痛こゝ今ハ一歩も進こ難れば大ゆ困窮し前路ハ郊原

む宿を乞ひ家居も有まゝ迎引友さんゆ醒井の驛より八半里余
も来過しぬ是ハ何とせんと猶豫せしゆ月山の端ゆさゆと明くなりぬ
ゆ一力を振く四方を望ゆ半町許右手ゆ木深き杜ありよりや今宵ハ樹妖
乃蔭ゆ一睡を催しゆあるとゆ少こ痛める足踏あ為して扶ゆ推ひたり
著々ゆ為ハ是墓所と覚しく若干の墳墓立並び新あるもの苔むせ
るもあり茲彼ゆ蔓草生茂ひ百合萌あんとの咲ゆれる風情夜月ゆ
もあれゆて手ぬきゆるゆ泳ん歌ゆ思ゆ乗毎の露滋くて自
然手向の水となりぬ彼所ゆハ頭のかゝれ能化尊座しゆ此方ゆハ高
らゆ溥らてゝる不動尊立ゆ物さびゝる三昧のうゝゆ方一間許乃
小堂あり香之助ゆ悦ひ是ハ究竟の宿ひとゝあくて扉押開ば蜘の巣ゆ

拂ひて之を何仏か知るべきなれど忍辱慈悲の御心に今宵の宿を求む
のべと獨言し乎く身を横ふしつ臂をまげく枕とし前後もしらず寐
なりぬ斯く二時許過て扉を小夜嵐紛もなく吹こしぬ香之助不
斗夢驚き早夜の明しかやと扉の板間より外面をのぞきぬ夜はまだ寂
深く傾く月影宵よりも冴まさり風三昧の林木をあらし蛩蚓墓間の叢
に鳴立て寂寞と物凄ふ彼所の墓の前に二人の男腰ヒ挂何う物語ふ声
す香之助紛れなく月影ふまかり熟見るに一人は手巾をして面を包れ顔はよく
ざれく身の丈短く飽まで肥太りぬ今一人は雲突だいの荒法師頭の毛は剃
栗のごとく生て面貌兇悪なり扨何をうちふやと息を殺つゝ見れば一人の男は
御坊はさぞかの縛をとくと通れく身を全うせしかさぞ疾に彼石佛の

ごとく前と胴とを別ちかのとて高き声法師が曰ふれよ汝が幸福を
乃ち此墳の下なる乙女なり其後は寺に飯を炊達に群に入りく
直あるを業なれば寛恕されど心ばりあり僧徒の行為は変だびて
銭にふれあれば萬の吏を心のまゝにふあるとは此世ぐく極楽に生ぜ心地よ此
程所の風説を聞て此墓に埋し乙女髪の飾もよき物まとせ衣あんともよき
限り著せく葬まりしを有まさ月も経ぬれば朽るくはよもいのちはいざや墓
我あぐる物有んぐり剥とりて分ちとらんとゝ云ひ一人の男は頭前をせ
ば御坊も我も共ぐく心長因に喰ひ飲もまぐれば猶恨みは彼乙女の
棺の中に生てあるまゝぞ都あるふ將てり女が手に賣て俄の長者に成
らんものと法師は云ひ歌まに一時

多賀鳥香之助
三昧の二賊を
懲す

金石譚巻之五

酔心ゆゑこゝに佳人とハ思ひたもんど。佳人有ゆゑ高声ハ結ぶに。頓て
卒部婆花筒より捨。各鋤鍬戈揚て棺を堀出し。蓋こぢ放らて手戈下
ゆゑ体あれバ香之助頻ハ側隠の心生し。衣著せて理葬せるハ富る
家の女ゆゑ眼前涙ハ剥せ戸ハ摩を茅せ人ハ使ひ業なり。いで
手懲して追ゆゑ。帯引ちる両刀ゆゑ。扉戈開て頭を出非道の兇賊
手戈動て吏あれと声厲く呼り乱ず。二賊仰天し。手戈ぐるて三昧堂
の方を顧ハ。十七八ゆゑ覚し紀少年両刀戈帯し扶掾ハ突立り。両賊ゆゑ青
年を見て侮を狂んでハ。はゝと笑て香之助ゆゑ前ハ立何者の見咎しハやと
あゝ膽を茱種ハし紀。ゆゑハ何国の童ゆゑ。膽斗ゆゑ三昧の堂内ハ
忍び居しや。察ゆゑハ汝ハ緑の林の芽生ゆゑ。彼棺の中戈心ゆけ窺ひ居

しゆゑめ。是ハ疾より我ハ得物ハ定めゆゑバ汝しゆゑハ指もさせ。早く
立去ねゝ。腮の髭ゆゑ撫ゆゑ誇ゆゑハ言放つ。香之助大いハ怒ゆゑ汝ハ曲れ
る眼より我をも倫児ゆゑる往奇姫なり。無益の舌を動ゆゑんより疾
く棺を出しの如く納めよ。若尚不法を働ゆゑハ悉く縛ゆゑ地頭ハ手へひき
渡ゆゑ。ぞゝ言物せ。両賊も又大いハ怒ゆゑ。一人の男力脱戈ゆゑ。此譯路
ハ危神のゝ人も恐ゆゑ。暗闇の牛戈ゆゑ。今一人の法師も眼
を怒ゆゑ。賊道ハ迷ゆゑ。今道心ゆゑ。古の長範ゆゑ。今安慶の怪
念しハ我吏ゆゑ。對手ハ不足あれども世の引導してゝ。両人とも鋤鍬
ゆゑ。ゝ撃てゝ。香之助物ゆゑ堂より内ゆゑ。飛下。右左ハ緑ゆゑ数度ひ
空をゆゑ。遠ゆゑ。暗闇ハ持ゆゑ鋤を引奪ひ。肋を丁と當ゆゑ否ゆゑんと

いひて仰反ふ墓の間ふ倒き伏剛気の怪念是ゆも怖まで頭微塵とす下
ま鈴をふして身戎避まで勢ひ余りて側ふ立ち石佛の前ふ強く当ら
と出る大花より尚逸早く多賀鳥ゲ步辻鋤ふ怪念も肩骨いく步痺
らふ痙む処をはけ入く續ふ程ふ是もはく絶死しく香之助步
ふ口剛ふ似るゆ言甲斐なく嵐葉ふと獨ぶち凄ふ死る
墓ふ步ふより手引出しる骸を棺ふ納んとせば月影ふ面をかしてを仰
天是ハ阿部屋摘内が女の狭衣子ふよく似より若其人の死しるあら覚
束ふ心地ふ再抱て上く熟ふ見ふ狭衣なれば是ハ何
ふて凋景骸をひさと抱たあ生る人ふ向ふ死ゆも御身如何ふ
て早く九泉の人となく我先年御身が方ふ止宿の折ふ一度懸相す

より露忘るふあぐれと勤仕の身とひ殊ふ主君の奢移ふ心戎困
わ消息を多死使を得ぐふも御身が家の門辺ハ通ふ君家の大
更戎思ふ身の色情ふ心ふ忠士の恥る処と思ひ死ふ面を隠して通り過
ふ豈ふ今宵此三昧ふ行墓ふ空ふ骸ふ會ふと是ハを
も夢ふ幻ふと且歎ふ且ふ涙雨の降ふ戸の面ふ立ふ落ふ須更
迄入ふ有ふふおふ怪ふ死ふ狭衣女忽ち口戎動く物を飲込けふい
ふれだ香之助再度呼然ふ前ふ賊ふ結ふ死て早十余日戎経と言
はふ今尚息の有ふ紐ふ我を惑さんふの狐狸の業ふ但ふ真ふ蘇生
ふと不審ふふ晴ゆぐふ胸のあふを抑ふふ心下ふ少ふ温気あふ是
心得ぞふ薬竜の良薬戎小指ふひふふ狭衣ふ口ふ含ふ花筒の水戎面ふ吹

ケ兎角して双抱とるゝ漸々ゝ惚身温気を生じ手足をうごく動りゝれば香
之助力を得耳根ゝ口をこゝ也。是やゝゝ呼る声。狭衣が耳ゝや通しゝん忽ち
息吹返し。呼ゝゝゝ目を開れ。香之助が面を熟とおゝる大ゝ驚ゝ体ゝく御
身ハ憑慕ひまゝゝ香之助君ゝて仕ゝ。何時の程ゝ来ゝゝ。彼法師を
何所へ行さゝゝ。又ハ何所ゝ母君ハと。辺りの残見廻して再度猿丸嵯ハ吾儕
ゝ家ゝ。是ハ夢ゝ現ゝて物狂ゝ風情ゝ。香之助急ゝ制ゝ高声ゝ
物ゝ。先此方へと手を取ゝ以前の堂内へ伴ひ入。杖壱を低ゝ今宵
此三昧ゝ宿ゝ賊ゝ物結を守。ゝの恥辱を忍ゝ二賊を打懲して骸
を搾納ゝ。温気の有ゝ左ゝゝて蘇生させ一五十残結ゝれハ侠衣
ハ守ゝゝゝ身を縮ゝ恐き驚ゝ。杖ハ危を難を救ひゝゝゝ吾儕ハ御身

ゝ別さゝゝ。ゝゝ此ゝ京師ゝ。明日やゝ
辺戎遥ゝ。去年の秋ゝ今年の夏ゝ毎ゝ店の端近ゝ出往
来の人ゝ目を付け侍ゝ。隣ゝ家の鶏を喰法師の有ゝ人を
呼んとゝゝゝ早其法師走りきゝ。吾儕を捕ゝ限ゝ殺し
ゝ怖ゝ恐ゝふゝ思ゝ其法の更へゝ。今ゝ一滴の露の
ゝ過ゝ思ゝ等ゝ忽ち人の呼声の耳ゝ入夢の覚ゝ心地して自を
開けゝ君在せゝ杖ハ音儕ハ疾死して此三昧ゝ葬ゝ侍ゝ。若君今宵此
ゝゝ。現世ゝ蘇る更も得ゝ。
頃年の念の通して憑慕ゝ君ゝ侍ゝ嬉ゝ。掌を合せ嬉
ゝ泪ゝ。其狼籍せ法師ハ彼所ゝ倒れ

賊僧なめり。彼が言へるをもてわりなく御身死して既に半月を経て蘇生するも
いと不測なり。ふとまれくもれ悪しきも悪きも死ハ楽なれり。御身のうちに空
しく棺に入れ埋殺してんと頓て両賊がかうに来りし。鍬を提て二人もに
空棺に入れ埋めえ来廣く大に造てせる棺あれバ大の男二人をも延尚蓋をも
隙なく鎖追ふく土を死掩ひ卒都婆をさへ立て扱の果報なる新仏
よ来世ハ地獄の一蓮託生俱に無量の苦患を受よとざれ言ひ鍬鍬をも人の
見ぬ方に捨ゝて狭衣に向ひいぶかへ夜の明さる間に父母の家に送とまゝ
せんと急ぎ世とも狭衣ハいと悦びて我倍一度死ぬ。今更蘇生ぬるとて父母の
家に仮に侍るべ。往反人に指されぬ死ぬ。換ゝる女よとこゝに辱しめられ且を心
ふかくなる夫なんど迎られて死をるに増ゝいと心苦し。何卒君何国

まれ妻ともなるべきれど足手まとひと思召て生ゝ辱死乃人ゝ死
て後の世の契を待まゝんと香之助が差添に手代ゝ賀島急に推止
め忠短に責ふ為ひて御身只自己の忝辱ゝ厭ひ父母の悲愁を思
さらハ大なる不孝なり。唯我言ふ通ひ家に帰て両親の心を安んじ人と種
そふ縁れ。狭衣ハ只涙泣ゝて家に帰ゝ我肯ざれど香之助大に
をてあまし我ハ君家の大恩を母ひ木國の父に絶せん為。夜を日に継いで
急く道に婦女子を伴ゝ如何あらん。流石振捨ゝ行人も心ある世業之
三列牛車の辺りに我乳母の有あれば。一旦彼所に伴ひ右も左も計ひ人
夜の明ば人の見知人もうるさし。唱やゝて立上ゝ狭衣ハ斜なる姿
ゝ身繕ひして香之助に引そひまぎれの暗に紛れ醒井茂を立出る

療異人左衛門得奇術條

却説仁王清包が子の猛丸は母たぐひ荒坊鑑を恨み父母を捨て逐電し諸所を漂浪し乞うが原来一銭の貯なれば何時しか放蕩無頼の悪徒の群に入不良業をのみ深くて溝に露命を保ち一年餅をこしらへれども兎角己が心に合ふ程の吏もあらざれば遂に悪友をうゝひ近隣の富豪の家に押入金銭を奪ひ掠め其を酒食の料にあゝ奢侈逸楽を恣にし是や世の縁か庚申子は賊にあらうて云言の空しからざる證ゆや有らん猛丸さて年齢いまだ若しと雖天性大膽不敵ゆゑ身の丈六尺に余り力量衆に勝れ力敵の業わが自然達し且膽畧逞しく始何に厳重なる亭宅と雖ども其の忍ひ入る死使を考へ人定の時を察し其身先忍ひ入門戸を開き衆賊を導き入り其上命を傳ふ法あり老幼婦女を懲しめ猥に人を殺害させし者出る時は自ら殿し掠る所の金銀を恥ずるゆゑ聊依怙の沙汰なく我が人も數を等しくし貧窮の家哀喪の家にのみ賊をなせども義を守ること如此あれば党悪の族も其智勇と信義に伏し何となく押尊んで首領と仰ぐ猛丸さて辞を色なく名を仁王左三門と自称後遠三其外諸列を横行し富民の銭財を奪掠を業とす其類を以て奪ひ東山東海二道の山賊強盗我もと風を望んで仁王の幕下に属する程に衆賊既に百余人に及ぶ左三門大いに悦び三別阿波が嶽の奥に塞を構へ是を船の栖とし已賊中の大王となり昼夜喜楽を恣にし浮雲の富を楽み非分の果利を求る然に

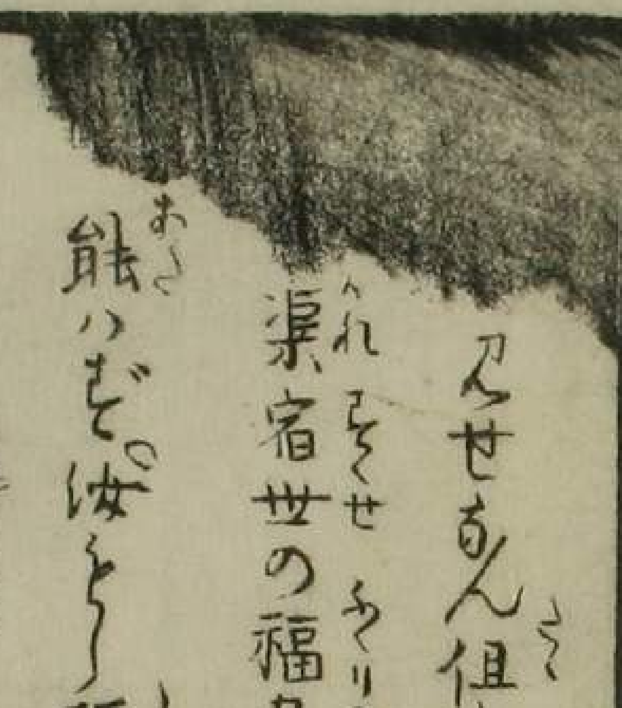
二王左三門一夜月の朗なるに乗じ泉宛を出で唯一人溪を廻り峯に攀て心を澄し逍遥する所に一人の老翁腰かがけて憩居さま左三門心緒に瞳を定めて熟々見るに毛髪は銀糸のごとく小夜吹風に散乱し面色黄ばみて鼻隆く眼星のごとく口巨あり身に白布の道服を穿ち手に異木の杖を撞き其躰さらに塵俗の徒とも覚えず頗る霊無の神仙に似たり左三門進み寄て老翁は何國の人ぞ夜中といひ峻絶の地に居るやと問老翁いと苦氣なる声にて我は當国宝来寺山の奥千壽ヶ峯の辺に住る者なり故有て當山に捨置せり我曾て人の毒に箭疵を蒙り矢鏃は抜捨られど鏃肉中に残りて次第に疼痛を増益夜乃苦悩堪がたく不堪幸に今汝に遭て何卒汝が佩刀を以て吊り脇

鏃を堀出し得させよとなん余義なくして頼まれける左三門答て我剱は帯るに虫華陀の術を得たれは輙く鏃を堀得んと能き仇に我なつかしく一葉の草を試に服しむるやと問翁いと嬉しがり其こそ望む所なり速に与へよとなん左三門頭を振薬湯今茲にあらず我は此山中に住者なり来りて薬湯を服し保養を加へんと勧めける翁肯んぜず三塵俗の家に入旦汚穢の食物を喫する事を欲せず明日昭惟へきなりて与へん決して余人を同伴あせそと命ず左三門承引して明日薬湯を持きたりて進ずと約を定め頭を別て山塞に帰り彼鏃付の鯉を庖丁せし時莊を覗て服せれた能鏃毒を癒すといひしを思ひ出て試みとて小賊に命じ韮を多く取きたらしめ洗のごとく水煎し陶に盛て翌早朝其を携

て山氏分登り件の所ゐいろ〳〵ふ翁ハ以前の岩頭ゐ待居ゐ。左エ門ゐ分ち持
ゐ陶を翁ゐ呈し。是鈦毒を解ぎる良薬ゐ早く服し給へと勧ぎ〻老翁依
熱ゐてゐも快げゐ飲尽し深く謝して暫ゐ還り返しぬ。是より左エ門日々ゐ韮汁を
山上ゐ運び〻翁ゐ服さしむるゐ日ゐ従ひ〻平癒ゐる躰あれバ奇異の恩をゐ
し。一日も怠ゐを運ゐ程ゐ第七日ゐ當る日老翁左エ門ゐ謝して曰。汝深情を以
て労を厭ゐず日々ゐ薬汁を我ゐ勧むるゐ。日ゐ追て痛み和らぎ今朝癒
ゐ。ゐ。ゐ。

二王左エ門異人の
金瘡を療して
奇術を授る図

しく飛入にあるに不測や只是徒に有がごとく眼明になへ
て更に水中に在更に覚えず頓て底にある黒き色の石
一塊を拾とりて浮み出るに身の侄たる奥のでく浮沈
心の思ふやうに自在を得たれば我ながら驚歎し先の岩
頭に刎上り全身を見るに所由水に濡たる迹なし左エ門
益奇なりとし欣然として件の石を翁の前に置低頭平身
して禮をなしども翁は妙術を授玉ふ尊翁ハ如何なる
神仙に在すや願くハ霊名を告したまへと乞問ふぞ老翁微笑
して吾ハもと人倫ならず金瘡を苦しミ暇に人躰と絵し汝に知
遇して治療を受しのミ今己に箭疵平癒せし上ハ本躰を現ハし



見せなん但し我故有て濱名の城主槻本英列に深き怨を結ひ
渠宿世の福力に依て三寶諸佛の冥助を得ましげ吾能仇を復する
能ハずや汝もし師弟の因ある思ハヾ一度槻本家に祟して吾憤を慰
免よかしで我正躰を見せてんぞとて杖を上て彼黒石を當ば忽ち二
つに割て石中より一道青気陰々として昇と中天にいたると比し黒雲
変して一天に充満し今迄晴朗なりし白日倉卒に大黒暗となり暴風巨
木を倒し甚雨降出霹靂震ひ轟き山谷鳴動して今や上天も頓ぬ坤軸
も砕るかとおそれぬ時に老翁はんと立さるぞとみるひさる身を躍して雲
中に飛入ぞと見えしが忽ち其丈二丈許の大蛇と変じ爪牙を怒し焔を吐
て西を指て飛躍し姿は見えずなりぬれば須叟に雨止雲散して元の白日と

なりふる。二王左工門眼前此奇特を見て驚歎し。扨八翁々蛇神ゆくあり
々ゝ。不側の妙術を我ゆ授賜ゆる上。我爲鴎恩の師父ゝ。時ゆ流ゆ
槻本一家を亡し。師の憤怒を晴し進せ。神変不思義の奇術を施天下を
横行して世ゆ跋扈しゆんと方すゆ有。おゝ悦ゞ快〳〵て。思ゆ呵々〳〵歩
〳〵い巣穴をさ〳〵てゞ飯ゆ

遭狭衣子再二兇難條

冬の鴛鴦の氷る夜床ゆ雄鳥を待春の雉子の焼野ゞ原ゆ妻を乞。皆ゝし
妹背の情ゆ。生〳〵生ゝの此ゆぶ〳〵ゆ。彼妻賀島香之助ゆ
止妻を得て狭衣を伴ひ。漸〳〵ゆ三列牛窪の辺りゆ乳母茅ゆ住家ゆ
尋行我身の上狭衣ゝ身の上落ゆ。扨名ゆ立越又ゆ對面し素

意を告て立飯ゆ。ふ〳〵狭衣を預ゆ。又余義ゆ〳〵頼ゆ。
茅ハ懇絶の理より育上ゆ香之助ゆ無妻ゆ。我乃て一度ハ悦ひ。或ハ其後者
乃爲ゆ流落の身と。ゆ〳〵を歎ゆ。且狭衣ゆ身の上を哀ゆ。所ゆ草屋ゆ
〳〵ゆ。ゆ女君を預ゆ進〳〵せんと。ハて安〳〵君ハ片時ゆ早〳〵濱名ゆ
ゆ。ゆ妻ゆ〳〵ゆ。残ゆ之ゆ。幼ゆ御時より一方ゆ〳〵ゆ。竈ゆ云月ゆ〳〵ゆ。父母
の二方ゆ〳〵ゆ君の御妻を気ゆ〳〵ゆ。無失ゆ。御不具
を彩り。ゆ〳〵ゆ人ゆ〳〵ゆ見咎ゆ。吾倭御暇賜ゆて此里ゆ飯ゆ。ハ君の
八の年の〳〵ゆ。指弦屈ゆ。ハ早十九ゆ〳〵ゆ。今ハ角ゆ〳〵ゆ男ゆ
ゆて到ゆ。ゆ〳〵人ゆ直ゆ見咎ゆ。ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ。ゆ〳〵ゆ
御身前髪を剃落ゆて。ゆ〳〵ゆ心得。砥石剃刀ゆ〳〵ゆて。ゆ〳〵ゆ合せゆ

ゝゝゝ

も今迄の香之助も人変あり色。今日より麦賀島香兵衛と名称あり。くうちゝ
又ゞ茅大いに悦ひ。せもて心行の徒しふと一陶の酒一串の炙魚を買きたり。三
人團居ゝ〳〵酌久し。互ひ其夜此夜張り合其夜ハ枕をまくへて所詮日の朝
〳〵起出香兵衛ハ旅装を綱へ。狭衣が変を乞ゝ茅ハ頼ゝ置ゝ立出すこゞ
二人ハ門送り疾飯アとゆくして影の見えぬまで乃送まゐり。斯く狭衣ハ茅が屋
ハ有ゝ香兵衛ハ飯ろ公一日三歩の思ひ待居るハ其より二日許過る夜の暮
もゞより雨もゝ〳〵降出し。次第ハ降まして雷さへ加ろ〳〵鳴出れば。
茅も狭衣もあと嘆られゞ二人燈のもふ沓。耳ハ手ゆあて慄れ居る所
忽ち滅裡〳〵と後門の扱ろ〳〵ぎ敢し。雲衝〳〵と二人の賊入来アて燈の蔭ハ変之
ゝり。両女ハ乃ろより仰天し。おやと言て鬼首ハ伏るゝ。茅ハ流石武家奉公し

くる程ありて衝ゐ裏く胸を押鎮め夜中しらひ背門を破りて立入ハ緑の林
ゐ住人あるべし。貯ある物もあれ姥が草屋ゐ入来ハ門違あんじせくるこゝゐ
乃ちらくゝ古衾ゐ針目ぐちゐ五六つ蚊帳も二重ゐ綴きぐ何だりの代ゐ
あるべ物凄ある家ゐ入りて仕合を得るべと思ひ〳〵色ゐて言ふれむ髪熊頭の
賊法師圓光眼を見張おゐ口道ゐ嫗ゐ手のひゝ行の破ゐ屋ゐ心あてゐ
有むこそ此二日三日窺ひ〳〵今夜斯入来き。是ある乙女々近江ある。醒井の門
部屋の娘ゐ〳〵見死して蘇生ゐ若者ゐ誘ひ此家〳〵来れるゐ。あらぐや我先ゐ
墳をあぐれ乙女が衣服櫛笄を剥〳〵んせゐ若者ゐ妨げられ剣〳〵指ゐ
こまれ既ゐ埋殺さ〳〵んせゐ辛うして遁き出道中筋の雲助ゐ掻問
て此家〳〵来着ゐ田八嗅付ゐ彼若者が有人程ハ亦妨あゐ思ふ。手と足ゐ

しゐ他ゐ行を待ゐ死我隠居ゐ手ゐ月足ゐも皆其乙女が故あれ奪ひ
て野上淺妻ゐ賣渡ゐ問ハ程の黄金を得あん如何ゐ暗闇〳〵乙女戎駕ゐ
乗ゐ連退ぐ〳〵と悪きけゐ〳〵むぐゐ亦漳のゐ〳〵ち奪去めゐ立ゐ〳〵狹衣ゐ
先ゐ凛ゐ〳〵ぐ武男ハ彼鶏を盗ゐ吾身ゐ逼ゐ法師ゐ一度あゐ二度あゐ
ぐ憂を入ゐ八前世ゐ如何ある仇ゐ結びゐ人今を為〳〵む中〳〵ゐ蘇らぐ亡
入と成〳〵ゐ〳〵ぐ又ゐる憂ハ乙ゐ戎と泛沈を何の情も荒れ法師驚ゐ崔を
抓〳〵ゐ提〳〵立上ゐ女ゐハ無念ゐ口惜ぐ〳〵せゐ〳〵涙ゐ〳〵怪念が手ゐ〳〵ゐ抱
乙此乙女御ハ養ひ君〳〵ゐ顔ゐ〳〵ある大切の方ゐ〳〵家内の物ハ何残ゐ〳〵ぐ〳〵ゐ黙
〳〵ゐ〳〵ぐ〳〵嫁を餌ゐ剥〳〵ゐ〳〵乙女御ハ者〳〵ゐ〳〵慈悲ゐ情ゐ是ゐ〳〵ふ両手を合
せ両賊を伏拝〳〵ゐ〳〵頼ゐ〳〵ぐ〳〵ゐ〳〵吹風ゐ〳〵流〳〵泛入狭衣が口戎縛ゐ古手巾の猿

潭双の手伝ひ後ゝ縛られ小眼ゝ狭く出打ぶさはせ〻〻て支る老女暗闇の牛
眼を怒らし是ハ犯人深夜老時る我徒り魅し此乙女泣ぶ泪を五舛八舛ちゝ
〻て手伝空〻〻て敢るべくも妨あして二つあ紀金むし失ひそ荒らゑ引
放せと猶も徒ゝ取捉る面倒なりと怪念ぶ腰ゝ帯さる錆刀抜き早く老女
る肩尖だ〻〻と切さ〻〻へぶ〻て呼と叫び倒き伏暗闇の牛脚とく蹴う〻。
ゝのゑ可愛やと咽喉をぶ一蹈蹈る足下のとゝ煮て用意の雲駕ゝ狭衣と
ちこ〻〻紀上く猶降ちる風雨ゝゆぶき何地もなく走り去る

隠雌剣清包醸禍兄根條

却説猿ぶ馬場の鍛冶二王五郎左エ門清包ハ槻木美別ぶ霊ゝ憑し霊鏡を刀
ゝ造〻〻と家の後ゝ假家を建船別火潔齋して假屋の西面ゝ七五三引

他の人ハ〻〻ぶ〻〻ちる雲の左ぶ〻〻し魚入夷を禁ゝ穢食を忘れ一心不乱ゝ鍛
程ゝ既ゝ半年余と経二口の刀を上上磨立て〻る〻ゝ焼及金味いそ〻方ゝく
鉗元より鋒すく玉散ぶ〻りの良刀ゝて二度此刀ゝ向ゝ時ハ心気澄こ〻り
て秋夜朗月を望ぶ〻〻く春天初日ゝ向ぶ〻〻くあれど我作ゝる我も見れ
あ〻〻用ゝ世ぶと歩及し〻〻ゝ獨言ゝ歎息し天晴名刀や乃ち唐土の留
魂ゝ得て〻龍泉大閤ゝ劔ハ〻〻ぶ我皇國ゝ名立る天國ゝ小鳥宗近ゝ小狐
と〻〻ゝ此上ゝハ至誠〻〻ぶと切ゝ〻ゝ清廉無欲の清包も〻ぶ〻〻欲
心萌〻て二口ゝ槻木家へ納人吏頻ゝ惜く〻〻り熟心中ゝ思ゝ〻ハ家出せ
猛犬が年残籌ぶ早十九ゝ往昔取替ら〻り我実子ゝ同年〻り如何ある
人の手ゝ養育ゝ〻ハ〻〻ぶ〻〻ぶ先頃高野詣せ人の家土産ゝ〻ぶ〻万年州

水ハ浮ベシ產の子の死生有ヒを試ル事ハ無カリ人こゝろ有る證據者
乃誓ひ疑ふべきハ有ども事年心を変して生ル子さる猛丸ハ心直ぐすして義理の父
母を捨家出して行方知ずせしハ老の思出ハ一度実子ハ田工今ハ夫婦の命
ずる愛宕權現求地ハ六道鮭化蓮赤ゑ心を異覺ぐ道ず炎會ハ多時節ハ
有ふる原来槻本家ハ刀二口製作せんの紛定もせぬハ二只彼家ハ献上一口ハ秘蔵
て実の子ハ會ハ時の引出物ハせんとの賢も不肖も子をおり人間ハ曇る胸の鏡
ふ捧船ハ二口の剣さ仮名船雄竜丸雌竜丸と号其雌竜丸の方を假屋ハ
祭アリ神檀の南辺ある松の柱の中を穿ちて我子の臍の緒と俱ハ収め藏ル埋木
と穿ち貝を埋ミ其上ハ紙をとりて船筆をこう
神南の石乃上ハ常盤木をきりまちこむる仏ちりあや

一首の和歌成を書付ける此更清包一人の心ハ秘隠ル妻のたゞ由ざる絆
らぶれた敢て他の人の知ぬ事ハ察ちるハ清包存生の裏ハ実子ハ
面會ル刀を与ハ心あれる其身駅ハ耳順の齢を超れど且久の命もとり難
く萬一若望を果さずして病死あるべ刀の在所の知すべくて松の木柱の中ハ刀
あるべの心を隠ル題ハよるあるべ時ハ槻本家の伯叔結明齊ハ先ハ二王清
包濱名ハ来アて鉄丸を刀ハ鍛人更を昔ハ飯アル既ハ約定の期も過ぬれば
今ハ大槻刀成就ハ注ル潜ハ見て心ハ合ハ名刀あるべ我權勢をもて押
て所望ル実刃ハ別ハ賣物をあぜて与ハ人と非分の望成起ル世上ハ佛恭
と擬露ル脱心の者西三人を徒ハ無ハ無して猿ヶ馬場ある清包ヶ家ハ入り斯
と案内ル清包出迎ハ上座ハ結ハ祐明清包ハ向ひ我今日此屋ハ来

ろ夷別義あるまじ。先達て本家槻本家より足下に託せし件の刀日成るまふまえ既に紡錘の期を遅さるまれば大槻製作の功終あん。足下が一心を凝してあり上人内見に及ばずして待ハ久しく思ふあるん領主英列頻に刀の成就を待ちん我に託して一應内見し来まるとて命せるふより罷越やうと言巧みりんれバ清色冷笑し。拙も心短夜御綻ある須め日限を言上仕ると虽細工の摸様ふよりて時日の延るハ平素の夷なりされどさだろう待ちうふふ各なるるる本意ふ背らん赤ぶ荒磨あぶ〳〵内覧ふ備ひんして船ふ〳〵仮屋ふ入白鞘の刀を携へ出〳〵ぶ迎祐明が前ふき〳〵出ると。祐明も無て刀剣の目利ふ精しられぶ古実を守り援級して手元より鋒すぶ去逐しるふ。焼刃白ひ右勝ぶ〳〵うと虽希代の霊鉄と切く鍛上さうと思ふ程の節も乃えされぶ心中深く紛ふ若清包我ふ術を悟やく

賢物を乃ぶ〳〵うふ。将渠虚名を貴実ハ此道ふ精しうぶる故霊鉄を鍛夷能ハす普通の地金ふて此刀然ち霊鉄ふうと偽るうと是彼思ひ聞うて夷ふ意決せぶと刀をあうあて黙然さる処ふ再度門辺より案内ぶ乞。槻本家の長臣芝賀島伊織袴裏美々〳〵出ふ来る。祐明是を乃ぶく大いふ狼狽し忙しく刀を鞘ふ収め。逃避んふも所狭ぶ茅屋ふく隠らふ。紀方ふ乃れバ絶ぶ蛍ぶ。挑灯あうう座を動ぶ得ぶ。伊織も祐明を乃ぶく心紛ぶ赤ぶう。先清包夫婦ふ寒暖終ぶ。扨祐明ふ対ひ。思ひけざる所ふく貴顔ふ向ひふ。何夷の御用りて當所ハ駕を促しるふ。と羽を和らく探ぶ問ふ好智の祐明さあらん物忘れもるハ老のあるふ。先頃夷の次ふ領主より刀の内見を託せられしふ失念して数日を過し。漸昨日あるふ出し。倖他出の次をとて。ふ當所ハ迄

[illegible]たりとさの真ちーくそゃくゑ伊織益怪ーミ。主君八聰明剛紀の人ゆ[illegible]一度人ゆ
命せーー妻を恋郎ちゆ丈人ゆくず。特老躰といひ親ーと伯叔ふうろ義を絶ー
ゆ[illegible]ゆあ[illegible]ず。笑の中ゆ剣を含む邪曲の祐明深紀子細であるうゆとおりくゆ
[illegible]練の伊織色ゆも出さず。扱ハさろ御用ゆ侍アーろ。某ゆ[illegible]ー人ア朝刀内見の主
命を蒙ア立越ゆひぬけー命を受ケ一日ゆ一時ゆ来アゆも不側の妻ゆ侍る武
[illegible]ゆ笑ゆくく言ゆれむ。祐明八伊織ゆ胸中を見透され釣の莚ゆ座とる思をゆー
我ゆ草内見をミられた羅飯りゆ[illegible]足下八寛やゆ内見ゆ後より飯宅ゆ[illegible]
いゆくく。清包丈婦ゆものそゆ[illegible]ゆ舎釈席を立さ恵ゆ乗ー飯路を急ぎ[illegible]
ゆ。半町許行く恵を立させゆ具せ〜家録掘越平二池堀喜向太両人を招き
何ろ耳根ゆ口を寄く密事を言合ゆ立忍ゆ[illegible]其事八恵ゆゆられてとを立ろ名

又亦清包が方ハ伊織主翁ハ方向ひ。祐明齊已ハ内見あられ之れども其も主命
を得られむ其刀一見せんやと乞清包ハ祐明王内命を得り迎刀を内ゑん
せんを仰られども其ハ応ハ疑ひ所あるべき霊剣の雛形ハとて赤さる新刀を
出せり欺きたり唱真の剣を見せ進ぜんと伊織を伴ひ仮屋ハ到り新作
なる神壇の上ある箱より下し白木鞘の新刀を出ハと鐵ハ奪上ぎと魚
是社二王清包が一期の思ひ出ハ猜刀を竭し鍛ひ上さる刀ばいご内見あり。ぶつを
いへと差出さ。伊織是を猜取懐紙を以ハ含て忌を防ぎ若実のごく押頂たく和
う援放し是を見るハ焼き匂ひたり。清光剣中より湧出電光のごく室中
ハ爛る四面の壁ハうげろひ乱れ。伊織感慨の余り呼も言ひとハ返りく稍久し
くあるべきて鞘ハ収め鐵ハ希代の名刀。其も麦く刀剣を見及ひられ。ものごと

るるハ名刀を刀ぶ。徐君の冢樹ハ挂し季札が剣。魏武が百萬騎を恢せし子竜が剣
ハ以ても。我朝の鬼切膝丸の太刀といへども斯程ハあらじ。槻本家乃主
主何物ハ是ハ如人と感歎して不止。時ハ清包傍ハ有し大盥ハ筧の水を移し入
白紙四五枚を水面ハ浮め。件の刀を援て逆ハ水中ハ下し。除ハ浮るる沾紙を切
ハさるハ様を。縦横。隨ひ浮し白紙ハ中ハ皺さるるあり。数
千ハ切きて春の池水ハ薄氷の砕けく浮ハ異あり。清包さる刀を整し側
ある鐔の鉄砧を。ろ。と切ハ。氏のごく五さ多ハ切裂ぬ。ごと刀の刃ハ一点も
損ずる事なく。再水中ハ紙をうつ。て切ハ以前ハ変る事なく。伊織を
驚を去て驚歎しる名刀成就の一ぞ。片時も早く主家へ持参し主君の心を
安へ。いへ足下の推察のごく。祐明内命を得し。偽り当屋へ来ばば必定

深く行くこと日あり然れども決して気を省いらしむる清包頭を左右ふ手揮
ふ〜其ぐ意に合ざる所あるまで今一二懲磨を為して捧ぎまつん今日より十日
を過ぐ御迎を賜ふりいへ。其刀を持参し侍べし。若祐明主推ふこと推く
刀清取んとあること先ふ乃ちる雛形の新刀をもて欺きいん。尚疑ひをいだ紀を
盡の動止あるふ於て八妻たぐひふ追散せ侍べ。渠女子〜心雄々しく力ら五寸
人ふ敵しいへ。十八人押入るも指もさせいハ。毛頭心をふ労しのひをとさ〜ふ
動こる色なし。伊織大ふ悅び此上八立飯ヲ主君小斯と言上ふんさ。油新
八大敵ふり。必ず刀ふ過あれ共心我責て身衛ふんと絨めた。清包夫婦小別
残告 濵名をこてで飯ヲ〜ふん

繪本金石譚前篇卷之五畢